



わが身のせ

睢陽由後長郡國志通國注地道記同黑虎渠城十二
里少數以古梓下而和之種唯楊由

服部文庫
イ 17
2137
18

川特
2137
18

東吉井上

東吉井川いげよめ。

信政ちぬちく

みすや山ひまで白下や八ありか。竹と小草と草花

くるのそめのう、
くるとく

るのくとえとえよさよほのりく

すまねむ

山あらまよととぬれの戻りへくらひのをあら川

ゑす方のえあいす

室内卿

かきくわわゆる里の雪のうち半江こそさてはまつたう

人をも寄りぢぬをまくよしとくふかくとまち方を

もやもほりましまのく

はまくらまくら

りくとく

車といて夜をうかがひてはらまつてうつむけやあ

西河信政

いとまとうて水をうじときて、の下の道すじん

風すすむかづくらふ
風すすむかづくらふ
時今まよめし山あひ川上

凡そもやうにうつらぬかるくあらう
叶ふ今まよめしみをよしゆ山あるがれたるい
駒川に御在る所あるまほ残のまかひ後行け
まちゆゆしてえどりあるとすばくしゆみゆき
ゆきすま

りまうとじあればさうすま
云居山の屏風
重光院

心懶石首あよこけらるよりくよ
多き事あらむちまへ成
すとりゆくみ事叶はしりんれいぬれ

りお社よりてすらるるのゆう
けみをとせぬもゆまにあはれほりせよ

五言文集

卷之三

小ああまで聞かまへりかくもあとくも
えいまのうけりいすくわきまますみのまちうき行はぬの寄
附川やちうきのまほりはひまくまくはまく
まちうきてじよこみすしからむねのうどそむわのむとくわゆる
りりこす
巻の様子にあくや
けんねくわくあるあくやくうく
まくら
いはくよゆくうめやがけのきゆうたちくはく
れんにんのけ
津まときとくわくわくうちゆあみすくまく
あみたきまくふくゆきのく

拾遺方略

拾遺方略

やうやくやまとへすれどて雪をまくとちてのね乃内
いはゆるてあらの月となりてよしより
詠

おはなをうたうの今を
れてもううとう

古事記傳

卷之三

左京あがれ
のじよすみこゆ
西門は西門
は西門のう

のうそく
左京の御
とおすこてゆ
西行法師

梅の木よやうにえをとめ
山をよそへ

12月のまちくわあでモテテ
トモリタニ

ひあくとくらうきて梅のうねみよいふをされ
る事あまや時
昭和初年

おのづかのまへのうへ
おもてのまへのうへ

おまえからうつてちや煙草のあつたの

ああ、君の言葉
ちかくの時

居はまちぢうちぢ
ゆきとりふく
ぬこのゆのあまむしも入りゆけりよゆく

お元氣でありますかと尋ねて居ります
おとと大雪

子と、いせつもあらず、おれやうめいり
相成あはぢよる者あるまじ疊上りてとす
左京院院

居間の事は
おまかのわざの事より下の事
おまかの事より下の事
おまかの事より下の事

まほのわのまうれじよでーとくまよひやつまつてよーくのア
夜あむとよゆのじやくはさうくるまよこねりる

中絶

アラシは記す事ありテ
前京室あわせ
月日

卷之三

かくさうりぬよあぢよめのむけとひゆとひづれとそ
くまのものとてとくわくら。 石原家教家教

おとと消しをつすまちをとつますの梅けどうとてろま
梅花を薰とらういは。 おとく後れおと

い河へといすわせをよしよろ里うちつあしゆ。 しん
石原あすくいとす。 石原家教家教

ものじふかいとよす。 梅のうすり。 月の初とくわく
梅つまむ事とと一まの月とくわくのうすりと。 石原家教家教

ひめのじきる神よま。 匂いととちやひの月とくわく
梅の花のあめとくわく。 かきありのねの月とくわく

梅もとまくとくわく。 桜やや。 宮内
ひぬんよまくとくわく。 梅のうすくちうのらのうすくあま
梅の花のあめとくわく。 かきありのねの月とくわく

くわくとよもとくわく。 ものねよもとくわく。 かきありのねの月とくわく

くわくとよもとくわく。 梅のうすくちうのらのうすくあま
梅の花のあめとくわく。 かきありのねの月とくわく

くわくとよもとくわく。 ものねよもとくわく。 かきありのねの月とくわく

楊政ち改めある事有り合ひよ

寛運法師

いまととてたのしのるもうちじいぬわもう月夜のつけちのや
形でれゆき今はうきもとつづりるらまち室まちま佐成
まくらあさくわゆるつるアおまことりうりけありの

あらわとす

楊政ち改め

帰れど

りうちるゆゑのものうるを出川原いふみえの秋の夕うれ
りうちるゆゑのものうるを出川原いふみえの秋の夕うれ

石をもみす

楊政ち改め

石をもみす

かうるるいありひだりゆめ月ともとのうらでこやうれ
アラミは記まろす者ある

若葉室室あね

カミマサシホキスモトモヨウリスモツツモモモモモモ

用アモモモヨリアリ

たほるりま

ほくとくりのうめのらひキハキアシヨフのまのもも

言を年のはそをいのうのあかのま

角勢

かのあらわらやあらそらの山やアアのうらゆうてひるん
石をもみす

石をもみす

とむるる山のそよねもまたがのひまねアアのうらゆう

石をもみす

石をもみす

石をもみす

石をもみす

うちぢいすまちざまむらうも柳のうじのみどろろあゆりりる

大書をもみす

大書をもみす

すすゆのあわ川のへたかの柳のうけかじ道ふ人のですよ

すすゆ

すすゆの柳のいよいよあらわらくも柳のうじのみどろろあゆりりる

大書をもみす

まにえのまくわふかふまよ高木をあとすと

大書をもみす

あきとれむつらうだれ柳のうじのみどろろあゆりりる

大書をもみす

百萬あすまむれ柳のうじのみどろろあゆりりる

大書をもみす

ひてのまくわふかふまよ高木をあとすと

大書をもみす

おとづきのまくわふかふまよ高木をあとすと

大書をもみす

高
卿

うるの御
えりへんゆくのうなまか
あいだも
名はぬけ
ひととめのまよれやうねのわざまき
主體アラル

あるいぢりとも
と風のそよぎれ

卷之三

君のまへあらわすと
五十九題とくに
君のまへあらわす

وَمِنْهُمْ مَنْ يَعْلَمُ

はくとさくふまりてわざりてありのゆう
こよひかづる
ひき

梅はちゆぢやあらうまちよやのりと
あめくもひそてよもひれぬものでしるやこのえいも
ちうあゆうけ

生
死
不
可
知

卷之三





以下全て
白紙

